HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ブルデューの言語論
著者	栗原，豪彦
引用	北海学園大学学園論集，140：81-106
発行日	2009-06-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ブルデューの言語論

栗　原　豪　彦

1．はじめに ── 今なぜブルデューの言語論なのか

本稿はフランスの社会学者・社会理論家であるピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu, 1930–2002）の言語論を扱うことから，まずは「今なぜブルデューの言語論か」という問いに答えることからはじめなくてはならない。

上の問いに対する答えになるうるものとして，まず第一に，ブルデューの社会理論の社会科学に対する大きな影響力ゆえに，彼の理論，とりわけその「慣習行動の理論」とのからみで展開される言語論がきわめて独特なものながら，注目すべきものであると同時に，その言語及び言語学に関する議論には見過ごすことのできない問題点が含まれていることを挙げるべきであろう。言語学の存在理由を否定するかのようなその挑発的な言説が理論言語学分野のみならず，社会の諸相との関連で言語の体系や機能を扱う立場にたつ言語学者の反発を受けるのもある意味で自然の成りゆきと言えよう（Hasan 1999: 27, etc. 参照）。第二に，これとは逆の方向として，ブルデューの社会理論と言語論の基本概念であるハビトウス（habitus），性向（disposition），資本（capital），場（field）などが言語学の分野，とりわけ談話の解釈にイデオロギーをもちこむ批判的談話分析（CDA）あるいは批判的言語分析（CLS）や近年のポライトネス理論における「言説的アプローチ」（discursive approach）と称される分野で援用されていることである。[1] さらにつけ加えれば，ブルデューの言語論をめぐる体系機能言語学者（SFL）や批判的談話分析（CDA）及び社会学者の間での論争が 10 年ほど前，ブルデューの生前に教育と言語の問題を扱う学術雑誌（*Language and Education*）上で行われたが，その論議（Hasan 1999, Collins 2000, Robbins 2000, Chouliaraki & Fairclough 2000, Hasan 2000, etc.）である程度明らかになったことは，少なからぬ議論がブルデューの理論や思想そのものの妥当性もさることながら，その教義の解釈（「読み（reading）」）や「矛盾」ないし「誤解」をめぐるもので，ブルデュー批判（Hasan 1999, 2000）とブルデュー擁護論の論点が必ずしもかみあっていたとはいえないことである。こうしたことも踏まえ，ブルデューの言語論のもつ意味合いや問題点をとりあげることは依然として意義があるとの考えられる。[2]

ブルデューの言語論が扱うトピックスは社会と政治にかかわる多岐にわたるもので，ここでは

そのすべてを取り上げることは，スペースの制約もあり，またもちろん筆者の能力を超えるものでもあり，到底不可能である。本稿では，ブルデューの社会理論が理論言語学や言語理論とからむ諸問題と語用論，とりわけ発話行為理論に関する議論のみをとりあげ，その他の話題はいずれ稿を改めたい。

本論に入る前に，ブルデューの言語論の拠って立つ社会理論（哲学）のごく大まかな輪郭をみておこう。ブルデューは自分の仕事には本質的要素が2つあるとする。第一は「様々な関係を重視するという意味で関係論的と称しうる科学哲学である」とし，第二の本質的要素として，「行為者（agents）の身体のなかに，また行為者が行動する諸状況の構造のなかに，より正確に言えば，身体と構造の関係のなかに書き込まれている潜在性に注目されるがゆえに性向的と称されることもある行動哲学である」ことをあげている（ブルデュー　2007：7-8)。後者は「慣習行動の理論」(a theory of practice)」として知られるもので，「ハビトウス，場・界（champ)，資本（capital）といった少数の基本概念に凝縮され」，「客観的構造（様々な社会的界の構造）と身体化された諸構造（ハビトウスの構造）との間の双方向の関係を礎石とする」哲学であると規定する（Ibid.)。

こうした哲学にもとづくブルデューの言語論のめざす「言語の生産と循環の単純なモデル」は「それ（言語の生産と循環）を言語的ハビトウスとその供給先の市場の関係」とみなすものである(Bourdieu 1991: 37-8)。その特徴は，日常の言語行動を個人が経済的，社会的条件のもと，特定の「場」（市場）とのかかわりで行う慣習行動としてとらえることにある。これだけなら，多くの社会言語学の営みと変わりばえがしないように聞こえるが，その特異性は言語市場と呼ばれるもののような社会的条件の力（影響）の不均衡なまでの重視にある。彼の（構造主義でもポスト構造主義でもない）独特の視点はときに「構成主義的構造主義の認識論（epistemology of constructivist structuralism)」とも呼ばれる（Chouliaraki & Fairclough 2000: 399)。[3] この視点は，なによりも社会学的に関与性をもつ言語的対立のシステムは，とくに理論言語学でのように，社会的条件を切り離して言語学的に関与性をもつとしてつくりだす対立に還元できるものではないとして，社会におけるさまざまな「場」（諸々の「言語市場（linguistic market)」）で社会階層や社会的位置や支配・被支配などの力関係を反映する言語の変種がもたらす示差的な社会的差異(格差)のシステムを解明しようとする姿勢から派生したものである。こうした哲学にもとづくため，ブルデューの批判の矛先が彼が「主権をもつ学問（sovereign discipline)」と呼ぶ理論言語学はいうまでもなく，ある種の社会学につながる社会言語学や語用論にまで容赦なく向けられるのはほとんど必然であろう。ブルデューはこうして，「言語科学を構成する境界に気づかぬかぎり，言語学者は，言語が機能している場所である社会関係の中に刻みこまれているものを（抽象的）言語の中に必死で探し求めるか，あるいは，そうとも知らぬうちに ── つまり，言語学者の自発的(「にわか」）社会学（spontaneous sociology）が知らず知らずのうちに文法の中に移入しているものを発見してしまう危険性とともにある種の社会学に従事するほか選択肢がなくなるのだ（Bourdieu 1991: 38)」と述べて，自ら境界を設定する理論言語学者も〝spontaneous sociology〞に従

事する社会言語学者もともに批判の対象とするわけである。[4)]

その論議で明かされる言語研究の成果や言語学界の動向に関するブルデューの知識不足や思い込み（ただし，博識なブルデューの言語論をハサンに倣って「にわか言語学（〝spontaneous linguistics〟）（Hasan 2000: 442）」と呼ぶのは躊躇される）に起因すると考えられる「誤解」やある意味で「独白的（Hasan 1999）」にみえなくもない議論を言語学分野での想定や常識であげつらうのはそれほど難しくはないが，それ相応のブルデューの慣習行動理論，つまり「性向的行動哲学（ブルデュー　2007：８）」の理解と言語の社会的諸相と個人の関係に関する一定の観点と姿勢が批判する側にもなければ単に水かけ論になる惧れがないわけではない。したがって，そうした作業はchallenging な作業に違いないが，上で述べた通り，ブルデューの理論や思想が言語学の分野にも浸透しつつあるという事情もあって，筆者の理解できる範囲内で社会理論家としてのブルデューの言語論をあえて検討してみようとするわけである。

ブルデューは多作の社会理論家であり，その社会理論に関する議論の中核において社会学者としては異例なほど多様なかたちでその言語観や言語学観を展開しているが，その議論の核心はBourdieu（1991）に明確に示されている。また，「慣習行動の理論」については，Bourdieu（1977）にまとめられているので，この２つを主として参照し，さらに必要に応じて他の著作も参考にしつつ，ブルデューの言語論と社会理論をつきあわせて考えてみる。

２．ブルデューの社会理論と言語社会学的モデル ── 客観主義と主観主義を超えて

言語と社会との関係や社会における言語使用の諸相をどう扱うかについては，言語学分野でも多様な，しばしば対立する理論が併存している。社会現象としての言語の諸相や言語と社会との関連については，社会学の分野としての言語社会学（sociology of language）（ブルデューの社会学的言語論はこれに属するとしてよい（Bourdieu 1991: 62））をはじめエスノメソドロジーや会話分析（CA）があるが，社会言語学（sociolinguistics）と総称される分野にも多様なアプローチがあり，多様なトピックが扱われる。批判的談話分析または批判的言語研究（CDA/CLS）や体系機能文法（Systemic-Functional Grammar, SFG），ことばの民族誌（Ethnography of Speaking）や相互作用の社会言語学（Interactional sociolinguistics）のような分野も現実の社会における言語行動のありようを独自のアプローチで扱っている。社会言語学は，1960 年代から地域（方言），人種，社会階層（威信方言を含む階級方言），ジェンダーや年齢などの社会的変数（social variables）と言語変異の関係，社会的文脈における言語使用の諸相，特定の状況での言語使用が社会的イヴェントの性質を決定するしくみなどを扱う学際的分野になっているが（Trudgill　1983, Stockwell 2003 など参照），多くは特定の社会理論や社会学に依拠することなく，あくまで言語の社会的諸相を対象として言語的観点からの記述と説明に徹して，社会学への越境を避けてきたように思われる。こうしたアプローチにみられる言語の不均等配分や一般に社会の不平等や格差に言語が果たしてきた役割に対する傍観者的，「客観性」を装う姿勢がブルデューが既成の言語研究

に不満を抱く主因になっているわけである（Bourdieu 1990, Hasan 1999: 37の引用)。1970年代以降，やはり言語使用の諸相を扱う語用論（pragmatics）の研究が活発化したが，この分野も言語と（社会的）コンテクスト，（社会的存在としての）言語主体の伝達意図，社会的行為としての言語使用の諸相を扱うことから社会言語学との重複は避けられないが（とくに社会語用論(societal pragmatics)（Mey 2001)），多くの語用論研究では学際的アプローチは必然的であるものの，話者や（社会的）場面・状況を扱いながらもやはり言語形式を中心とする客観主義の境界にとどまろうとする暗黙の了解がみられる。こうして言語と社会とかかわりや言語の社会的諸相を扱いながらも，一定の範囲にとどまる社会言語学や語用論などでは，言語理解・解釈にはテクストないし談話・発話の内部にあるものと解釈者が解釈にもちこむ言語知識や非言語的想定や知識がともに関わる（両者の相互作用である）ことには大方の合意がみられるが，現実の談話を解釈する際にどういう社会的要因をどの程度考慮するかについてはさまざまな立場がある。

2.1. ブルデューの慣習行動の理論と言語観

ブルデューは，すでに触れたように，社会科学に大きな影響を与えた「慣習行動（practice）の理論」あるいは「性向的行動哲学」と称する社会理論で知られるが，この行動哲学（理論）の要素のひとつは，「身体と構造の関係のなかに書き込まれている潜在性に着目する」もので「ハビトウス（habitus)，場または界（champ/field)，資本（capital）といった少数の基本概念に凝縮され」る。つまり「客観的諸構造（様々な社会的界の構造）と身体化された諸構造（ハビトウスの構造）との間の双方向の関係を礎石とする」哲学であり，「社会的行為者，そのなかでも特に知識人が行動（practice）を説明する際にごく普通に用いる言語のなかに書き込まれている人間学的諸前提と根底的に対立する（以上，ブルデュー　2007：８）」ものとされる。[5)]

ブルデューの慣習行動の理論は，社会科学を悩ませてきた二項対立 ── 個人と社会，行動と構造など ── を超える体系的試みとして意図されている（Thompson 2001: 11)。ブルデューにとってとりわけ重要な意味をもつのは，認識論（epistemology）における主観主義（subjectivism）と客観主義（objectivism）の対立であるが，彼はそのいずれにも与しない立場をとる。ブルデューにとって，主観主義とは，現象学的社会学を意識した見方，つまり世界に位置する個人が世界の様相を把握しようとする際にとる世界に対する自らの知的位置づけ（intellectual orientation）である（Ibid.)。一方，客観主義とは，行動と表象（representations）を構造づける客観的関係を構築しようとする知的位置づけである。それは直接体験（一次体験）からの断絶を前提とし，そうしたものが依拠する構造や原理を解明しようとするものである。ソシュールにはじまる構造主義(言語学)やチョムスキーの生成文法，レヴィ＝ストロースの社会人類学的分析の方法がこれに当たる。

ブルデューは，主観主義も客観主義も知的位置づけとしてどちらも不適切だが，客観主義のほうが不適切さの度合いは軽いとする見方をとる。客観主義の主たる長所は，社会での直接的経験

と断絶することによって，素人の行為者がもつ実践的知識に還元できない社会的世界（social world）の知識が得られることである。ブルデューによると，社会科学の研究には直接的経験からの断絶が必要条件となるが，客観主義の欠点は，可能性の諸条件を厳密に省察できずに，説明すべき客観的関係や構造と社会を構成する個人の実践活動（practical activities）との関連をとらえることができないことである。客観主義の観点からは，個人の実践活動が単に規則が適用された例 ── 分析者が構築したものの付帯現象（epiphenomenon）にみえたり，モデルや構造の実現にすぎない，とされることがあるというのである。こうして，ブルデューの慣習行動の理論は，主観主義に陥ることなく，しかも客観主義を超えて，直接経験との断絶を考慮しつつ，同時に社会生活の実際上の特質を公平に扱おうという試みとみられるわけである（Thompson 1991: 12）。

慣習行動の理論を言語行動と社会の関係に適用することで，ブルデューは，言語を単にコミュニケーションの手段や方法とみるのでなく，社会の諸相を反映するものとみるわけである。ブルデューは「言語学者があらかじめ構成した対象（pre-constructed object）を，その構築の社会的法則（its social laws of construction）を無視し，その社会的発生（social genesis）を覆い隠して彼らの理論に取り込んでいる（Bourdieu 1991: 44，強調原著）」として，ソシュール（『一般言語学講義』）が言語と空間の関係を論じたくだりを批判しているが，ブルデューが言語と社会のかかわりでとくに重視するのは言語の変種が社会市場で獲得する価値（象徴的価値）の格差であり，（理論）言語学が対象とする抽象的な「言語」は「言語共産主義（linguistic communism）の幻想」にすぎないとも言う（Ibid.）。こうしたイデオロギーがらみの姿勢は，たとえば，言語を人間の脳中にしかないとみて，人間の言語機能（human faculty of language, FL）に特有の特性をつきとめようとする生成文法の主たる関心事の対極にあるといってよい。言語という複雑多岐な現象の性質や学問の客観的情勢に鑑みれば，言語への多様なアプローチが共存することを認めてもよさそうだが，ブルデューの言語観ではそうした姿勢が入りこむ余地は一切ないようにみえる。

ブルデューでは，言語の変種として現われる個人の言語獲得や言語使用（表現のスタイル）が社会の階層化，分類化，格差の源となり，（暗黙または公然の）社会的認可や言語的市場（linguistic markets）における検閲・制裁によってその位置づけと格差が再生産される仕組みとみなされる。とくに個々人の言語使用能力としての言語資本（linguistic capital）は，他の文化資本の伝達法則にしたがい，学校的な基準で測定される言語的能力というのは，教育水準（獲得された資格で測られるようなもの）と社会的履歴（social trajectory）しだいで決まるとする（Bourdieu 1991: 61）。「正統な言語（legitimate language）の獲得はその言語に比較的長期にわたりさらされるか，明示的規則を意図的に教え込まれるかすることで熟達するものであるから，表現様態（modes of expression）の主要な階級は，習得様態の階級に対応する正統な言語能力の生産の主要な 2 つの要因である家族と教育システムのさまざまな結合形式に対応する（Ibid.: 61-2）」のであり，この意味で，「言語社会学は文化社会学と同様，教育社会学から切り離せないとする（Ibid.）」として，多角的な学際的アプローチをとる理由を説明している。ブルデューのいう「正統な言語」とは，

社会の知識（支配）階層が身につけ，公式の場や教育の場（教育市場）で使用される型の言語であり，そうした言語を身につけていない階層の人々が支配され差別化されるしくみが再生産されつづける社会の構造を問題にするわけである。

本稿では言語と教育のかかわりには深入りしないが，ブルデューは，「正統文化の守護者の審判（verdict）に厳密に従う言語市場として，教育市場（educational market）も支配階級の言語的産物に厳密に支配されており，あらかじめ存在する資本の差異を認可する傾向がある」と述べて，家庭と教育システムという2つが正統言語能力の産出にかかわること，つまり「低い文化資本* がその資本を増強しようとする傾向が低いこととあいまって，社会的恩恵に浴する度合いがもっとも低い階層は，学校市場の否定的な裁可（negative sanctions），つまり成功がおぼつかないことから，市場から排除されるか，自ら早期に退場する羽目に追い込まれる（Ibid.）」。[6] こうして，発話者の言語使用が社会の場におけるその地位や力を反映し，個人や社会集団においてそうした「社会的差異のシステムを象徴的次元における示差的偏差（the symbolic order of differential deviations）のうちに再生産する」メカニズムが解明すべき対象となる（Ibid.: 54）。ブルデューは日本での講演でもこうした観点から「学校制度が既存の秩序，つまり異なった量の文化資本を付与された生徒たちの間の格差を維持する」しくみ，「もっとはっきり言えば，一連の選抜作業によって，学校制度は相続した文化資本の保有者を非保有者から区別するのです」と持論を述べて，日本の社会での具体例に言及している（ブルデュー　2007：47）。言語のもつ選別機能もたしかに重要な社会学的トピックにはちがいないが，本節の課題からやや外れることと紙数の関係で，本稿ではこれ以上は論じられない（ブルデュー2007も参照）。

2.2. ブルデュー理論と言語学への影響

前節で述べたような社会学的観点から，ブルデューは自ら構想する社会学的ないし言語社会学的モデルの位置づけについて，次のように述べている。

「言語的生産と循環・流通（circulation）を言語的ハビトウスとその産物を供給する市場（markets）との関係とみなす，この単純なモデルは，コードについての厳密に言語学的分析の正当性を疑うものでも，またそれにとって代わろうとするものでもない。しかし，このモデルは，言語学が陥入る誤りや失敗を理解することを可能にすることは間違いない。言語学の誤りとは，つまり，関与する要因のただひとつだけ ── 言語（能力）がその生産の社会的条件に対して負うているすべてのものを無視して抽象的に規定された厳密に言語的能力（strictly linguistic competence）── に頼り，言説（談話）が示すあらゆる結合上の特異性（conjunctural singularity）を適切に説明しようとする際に生ずるのである（ibid.: 37-8）」。

こうして，ブルデューは自分のモデルが既存の言語学にとって代わろうとするものでないと言いながら，コードの言語学的分析のみに終始する研究の無意味さを強調し，実際の言語のありよう（言説の特異性）── 言語が本来機能している場所である社会的関係に刻みこまれているものを

抽象化された言語（ラング）の中に見出すことの誤りを繰り返し説くことになる（ibid.: 32f, 37-38）。しかし，ここで注意したいのは，言語学が研究対象として抽象化された言語の自律性を主張したからといって，言語使用（意味的選択）における話者の社会的コンテクストの認識やその制約を否定するものではないことはどの理論も認めている。この点をブルデューは見落とすか誤解しているようにみえる（Hasan 1999: 61）。

ブルデューの言語行為とハビトウスあるいは性向との相互関係については，以下でブルデューの論議を紹介する過程で繰り返し触れることになるが，ブルデューの紹介者として定評のあるジェンキンズは，ブルデューの「性向」が社会的経験を通じて獲得されるのに対して，チョムスキーの生成文法のモデルにおける成分や構成要素がヒトの脳・生理機能の産物ととられていることを対比し，（純理論的ながら）深層の言語構造と実際の発話とをつなぐメカニズムを提供しているのに対して，ブルデューのハビトウスのモデルはこの点で欠陥のあるもの（deficient）だと指摘している（Jenkins 2002: 79）。ただし，ジェンキンズの意図は明確でないものの，チョムスキーのモデルでも言語能力とその運用の関係に関しては研究プログラムの構想はあっても明確に規定されたことはなく，（主流の）生成文法が運用の具体的研究に踏み込んだことはないこと，さらに，生成文法の理論的変遷にともない，両者の関係の理論的扱いも微妙に変わっていることだけは指摘しておきたい（Chomsky 1995, 2000 など参照）。

さて，形式・理論言語学（formal linguistics）と異なり，社会言語学は定義上，言語と社会の諸相との関わりを扱いながら，多くは社会との関係で言語変異の様相を前景化する研究方法をとることから，「客観的諸構造（様々な社会的界の構造）と身体化された諸構造（ハビトウスの構造）との間の双方向の関係を礎石とする」哲学にもとづくブルデューの批判を免れない。しかし，一方において，こうしたブルデューのイデオロギーがらみの言語観，言語学観が，社会理論や社会学の枠を超えて，近年の社会（学）的語用論におけるポライトネス理論のアプローチ（言説的アプローチ）や批判的言語研究（CLS）などの分野で指示され援用されていることはすでに触れた。たとえば，フェアクラフの CLS は，（発話行為理論を含む）語用論が分析哲学と結びついて現実と遊離し，個体主義（individualism）に陥っているという弱点をもつとする一方，社会的行為としての現実の（日常の）会話を扱う会話分析，エスノメソドロジーには一定の評価を与えながらも，いずれも談話解釈にかかわる想定の多くにイデオロギーがからむことを無視し，社会的実践（social practice）としての会話をあたかも社会的真空状態（a social vacuum）にあるかのごとく扱う，として批判するとともに，こうした欠陥を補う言語研究のモデルとしてブルデューの理論を援用している（Fairclough 2001: 7f, 118）。そこでの関心事は，社会構造によって決定される社会的実践としての言語である談話（discourse）の諸相である。たとえば，社会制度と関連する種々の慣習や社会制度と社会における力関係により，イデオロギーにもとづいて形成される談話の制度・慣例（orders of discourse）など資本主義社会における階級差や力関係の様相であり，ブルデューの社会理論を援用していることもあり，「慣習行動の理論」との共通点が多い。次節で

はこうしたブルデューの既成の言語学に対する批判のもととなっている言語学の前提や想定に関するブルデューの見解とその妥当性をやや詳しく跡付けて検討してみる。

3．ブルデューと理論言語学

前節で紹介，解説した「慣習行動の理論」は，ブルデューの理論言語学批判の妥当性を論じるのに必要な背景知識であると同時に，それと不即不離の言語（学）論は，純粋の言語学的論議と性質が異なるがゆえに，その意味合いと意義を評価するのはいささか用心が必要になる。すでに述べたとおり，ブルデューは，言語学ばかりでなく社会科学全般にも大きな影響を与え「支配して」きた言語学，とりわけソシュールとチョムスキーに代表されるような（ヨーロッパ）構造主義言語学や形式言語学に定着した言語観と概念やその客観性を担保するはずの（自然）科学的方法論を痛烈に批判したが，言語学が普及させたそうした研究方法，つまり社会における地位や権力にかかわる言語変種や経済的，社会的条件と切り離して抽象化された「言語」の概念 ── ソシュールの言語（ラング，langue）やチョムスキーの「言語能力（competence）」（現在はＩ言語）では，社会における言語の生産と循環の様相を正しくとらえることができないとし，個人の慣例的言語使用の様相がその供給先である言語市場との関係とその経済的，社会的条件をとりこむ「言語交換のエコノミー（economy）」の考察を提唱するわけである。「知的操作の対象」になった言語理論が諸々の社会科学に及ぼした影響に関するブルデューの容赦ない批判が理論言語学だけでなく，社会言語学，会話分析（社会学の分野），語用論，とりわけ発話行為理論にまで向けられるようになったそもそもの発端の事情を知るには次のくだりが役立つ。

「ソシュールが流行る前に，わたしはある「文化の一般理論」を確立しようと，その『一般言語学講義』を入念に「読むこと」にもとづく学問的な勉強（幸いに出版されなかったが）にとりかかったが，私は言語学という支配的学問（the sovereign discipline）が行使する支配（domination）のもっとも目に見える影響に対して他人よりも敏感だったのかもしれない。その影響がたとえ理論的著作（theoretical writings）を字義どおりに書き写すことであろうと，（言語学の）概念を額面通り機械的に転写することに関わるものであろうと，あるいはまた *opus operatum*（構造化された構造，為された仕事）を *modus operandi*（操作法，意識の生産的活動）[7] から分離することによって予期せぬ，そしてときには途方もない再解釈をもたらすあらゆる軽率な借用に関するものであろうとそれは変わらない。しかし，流行りの趣味に抵抗することはけっして無知を公認するように宿命づけられた拒絶などではない。つまり，当初はソシュールの著作，次いで，パロール（および慣習行動（practice））[8] を実行・行使（execution）とみなすモデルの不適切さに気づいた時点で，チョムスキーの研究が，生成的性向（generative disposition）の重要性を認めたものではあるが，社会学に根本的な問題をいくつか提起しているように思われたのである（Bourdieu 1991: 32-3）」。

たしかに，ソシュールは，「社会的事実」，「社会制度」やら「社会集団が採用した必要な慣習の

総体」といった概念を使いながら，言語学の研究対象としてラングを抽象化したが，その経緯について，ブルデューは一切触れることがない。ここではブルデューのソシュール論をことさらあげつらうことはしないが，ソシュールの解釈については，少なからぬ言語学者や他分野の影響力の強い学者もなんらかの「誤解」をしていることは，Harris（2001）でも指摘されているとおりであり，ブルデューも例外でない（同様の指摘については，Hasan 1999, 2000, Robbins 2000: 428 など参照）。[9] ただし，ブルデューはそうは言いながら，ソシュール（やデュルケーム）の影響をまったく受けていないとは言いきれないことはその言説から推測できる。いずれにせよ，ラングとパロールの相互依存関係やパロールの言語学の可能性をソシュールが構想していたことを無視している点などは問題であるが，むしろブルデューのより重大な問題点は，後述するように，言語学におけるさまざまな理論や流派の存在とその理念を無視して，言語学や言語学者をひとくくりにして，ある種の「風刺漫画」的批判の対象としていることであろう（Hasan 1999: 28）。[10]

3.1. 言語の概念と社会的言語

これまでの議論の根拠は，ブルデューによれば，理論言語学，とくに構造主義や生成文法が措定する「言語」── 支配階層の言語＝公用語と結びつくとする ── という抽象化されたもの自体は「言語市場に出回って（流通して）（Ibid.: 39）」おらず，出回っているのは唯一「産出においても受信においても」，「スタイル上特徴づけられるような言説（stylistically marked discourses）（ibid.）*」だからである。さらにスタイル上の特徴をもつ（有標）というわけは，「個人は共通の言語（the common language）から個人語（idiolect）を形成するとともに，発話の解釈においては，個々人の特異な経験や集団における体験をつくりあげるすべてをそこに持ち込むことによって各自が知覚し評価するメッセージを生産するのに役立つ（ibid. 強調は原著者）」からでもある。

個人の言語使用とその様態（modes）に関するブルデューのこうした見方が誤っているというわけではないが，特定の社会的場面（ブルデューのいわゆる場や市場）における個人の言説（ソシュールの用語ではパロール）はそれを可能にしている脳内の言語（能力）があればこそであり，両者は（ソシュールが解説しているように（『原資料』））相互依存関係にあるにもかかわらず，ブルデューでは他の箇所でもそうだが，この相互依存の関係，とりわけ上述のように，脳内の言語（能力），つまりラングの果たす機能や役割が（否定されているわけではないものの）ひどく軽んじられて，言語が単なる付帯現象（epiphenomenon）になってしまっている（Butler 1999: 122）。ソシュール（とチョムスキー）が方法論上，抽象化した言語を優先したことは確かだが，チョムスキーはともかく，少なくともソシュールは言語学が言語使用（パロール）を通じて脳内言語（ラング）を研究するだけでなく，両者の相互依存関係の解明を目指していたことをブルデューは無視している。ハサンが体系機能言語学（SFL）の立場から個人が言語を使用できる能力条件としてのラング的なるものの軽視に言及していることはすでに指摘した（Hasan 1999: 32）。ただし，SFL の立場は，ブルデューと同様，ラングとパロールの分離に異を唱え，後者を内的言語学から

除外すること，さらに内的，外的言語学の区別自体を問いただす点では共通点があるものの，ラングの概念が言語研究にとっては不可欠であることを認めること，ただし，両者の関係については，ソシュール（やチョムスキー）と異なり，両者を別々のものと見るのでなく，一体の現象だとする点で異なる。ハサンは，Halliday (1996) の次の比喩を引用する。すなわち，「言語（言語体系）とパロール（言語の使用例）は観察者のとる位置（position）が異なるだけである。（つまり）言語（ラング）とは遠くから眺めたパロールであり，したがって，言語は理論化される途上にあるものである (Ibid.: 33)」。Hasan によると，こうした Halliday の研究路線が暗黙裡に推進しているものは，ブルデューの「慣習行動の理論」── すなわち，社会科学研究の望ましい条件として体系と具体例 ── 異形（the variant）と不変形（the invariant）との相互依存関係を提示する理論 ── と共通性をもつものの，このラングとパロールの分別を強烈に批判することで，ブルデューは言語科学を行うにあたってその相互関係の重要性を強調し損なっている点が体系機能モデルと大きく異なるとする（強調筆者）。つまり，肝心の創造的言語使用を可能にしているもの，つまり言語の意味構築力（the meaning making potential of language）については，ブルデューは何も述べていないというわけである。またブルデューは社会的なもの（権威や権力）のようなものが外から言語に入り込むという比喩を使いながら，それが記号にどう入り込むのか，そのしくみについてはいっさい問うことがない（Hasan 1999: 62)。

ブルデューの言説の端々からわかることだが，彼はラング的なるもののそうした働きをまったく否定しているわけではなく，意味を構築する言語の創造的側面に言及はしている（Bourdieu 1991: 41, etc.)。しかし，社会的関与性と個人や集団のハビトウスを重視するあまり，そうした本来の潜在的能力を不当に軽視している印象を与えているわけである。たとえば，ブルデューは「文法はごく部分的にしか意味を規定しない ── つまり，言説（discourse）の意味作用が完全に決定されるのは，それが市場ととりもつ関係においてである。意義(sense)の実際的定義(the practical definition）を構成する決定要因の一部（しかも少なからぬ部分）は自動的に外部からくる（ibid.: 38)」と述べていて，文法に象徴される言語の〝semiotic（Hasan 1999)〟の構成原理そのものを否定しているわけではないことは疑いない。ただ，彼の過激な表現がそう思わせている側面はたしかにある。すでに触れたように，ソシュールが「言語に内在的なあらゆる社会的変異」を除外したことを問題視していることから，ブルデューが社会的変異が言語に内在するという考えを支持していることは明らかであるが，社会科学の説明すべきことを論じた次のくだりはこれとやや「矛盾」する印象を与えている。

「社会科学が言語の自律性，その特有の論理ならびにその作用の特定の規則群を考慮しなくてはならないという事実は変わらない。特に，しばしば立証されているように，言語がその生成能力に限界がない典型的な形式的メカニズムだという事実を斟酌しなくては言語の象徴的効果を理解することはできない。言えないことはなにもなく，何も言わないことも可能である。言語ではあらゆることを語ることができる，つまり，文法性の範囲内では。われわれはフレーゲ以来，語が

何ものも指示しなくても意味をもつことを知っている。言い換えれば，形式的な厳密さは意味的自由奔放さ（semantic freewheeling）を覆い隠すことができるのである（Ibid.: 41，強調原著）。」

こうして，ブルデューは，「この社会哲学と関係を断つには，社会的な関係を ── 支配の関係さえも ── 象徴的相互行為として，つまり認知（cognition）と認識（recognition）を暗示するコミュニケーションの関係として扱うことは正当ではあるが，すぐれてコミュニケーションの関係である言語的交換，つまり言葉のやりとり（linguistic exchange）は，話者や話者それぞれの集団の間の力関係が現実となる象徴的権力の関係でもあることを示す必要がある（Bourdieu 1991: 37）」と主張する。言語行為とハビトウスの関係については，ブルデューの説明はより具体的で雄弁である。

「あらゆる発話行為（speech act）及びより一般的には，あらゆる行動（action）は，独立した因果関係の連続の遭遇である結びつき（conjuncture）である。一方では，言語的ハビトウス（linguistic habitus）の社会的に構築された性向（disposition）があるが，これは，ある定まった事柄（表現上の関心）を話したり述べたりするある種の傾向やある話す能力を含意する。こうした能力は，文法的に正しい談話を無限に生成する言語能力とこの能力をある特定の状況で適切に使用する能力をともに伴うのである。他方においては，言語的市場の構造（the structure of the linguistic market）があるが，これが特定の認可（sanctions）と検閲（censorships）の体系として押しつけられるわけである（ibid. 強調筆者）。」

傍点部のように，ブルデューが潜在的言語能力＝ラング的なるものの存在を否定してはいないが，ここでブルデューが強調するのは，社会的場面（「言語市場」）での言語使用は個人の恣意に任されているようにみえても，何をいかに言うかなどの選択には社会化の過程で個人の属する集団や環境など客観的社会構造から身につけた性向やハビトウスに沿った慣習行動（言語行動を含む）によるものだが，一方でそれになんらかの制約を課すような社会や集団の側の（暗黙の）慣習や圧力がある，という社会的メカニズムである。

3.2. 言語と社会をめぐる問題

ブルデューは，社会から切り離された個人の脳内の貯蔵庫としての「言語・ラング」（langue）の自律性を前提とする方法論を否定するが，それは，そうした言語学のモデルが想定する統一的で均質的な言語共同体などというものは存在しないという理由にもとづく。ソシュールが「言語の個人的使用（appropriation）にかかわる経済的，社会的条件を問う必要がないままに解決してしまう」こと，しかもこの解決を「財宝（treasure）」というメタファーを「共同体（community）」と個人とに無差別に当てはめることで行なったことを批判するわけであるが，同様の批判はチョムスキーにも向けられる。すなわち，チョムスキーが言語理論の主たる関心が「完全に均質的な言語共同体における理想的な話者・聴者」だとして，ソシュール的伝統が暗黙裡に与えた完全な言語能力を，普遍性を備えた発言主体（the speaking subject in universality）に与えていると

する利点（merit）があるとしながらも，現代の一般言語学の創始者たちがそうした立場をとり，なおかつ変更しようとする説得力ある理由も提案されたためしがないことからして，チョムスキーの「言語能力（competence）とはソシュールのラング（langue）の別名にすぎない」とする（Bourdieu 1991: 43-4）。周知のとおり，このラング＝言語能力の図式は，チョムスキー自身が「密接な類似性がある」ことは認めながら，「根本的相違もある（Parret 1974: 35）」としていることから，言語学ではすでに陳腐で，不正確な議論だったはずだが，社会学ではこの断罪は新鮮な衝撃だったのかもしれない。こうして，ブルデューは，「正統な言説に内在する諸法則（the immanent laws of legitimate discourse）を正しい言語行動（correct linguistic practice）の普遍的規範に転換することによって，正統な言語能力（legitimate competence）の獲得と正統なるものと変則的なものの規定が確立され押しつけられる経済的，社会的条件を回避している」としてチョムスキーを批判するわけである（Ibid.: 44）。これに対抗すべき「説得力ある」ブルデューの（言語社会学的）モデルが言語の生産と循環は，社会における慣習行動（practice）としての言語使用を生みだし，かつ規制もしている言語的ハビトウス（linguistic habitus）とそうしたハビトウスが生みだす生産物の供給先である（言語的）市場（market）との間の（双方向的）関係とみるモデルであることはすでに述べた（Ibid.: 37-8）。ハビトウスとは，既述のように，社会的に形成され身体化された性向（disposition）の体系で，個人や集団が所属する社会階層や教育背景や社会的地位，さらに文化的・社会的環境などによって形成され，（無自覚のうちに）身体化されるが，言語的ハビトウスには文法的な言説を限りなく生み出す言語能力と「場（field）」に合わせて適切に言語を使う社会的発話能力がともに含まれる。ところが，そうは規定しつつも，ブルデューの議論では「言語能力」が随伴現象であるかのように軽視されているのが問題である。ハビトウスも「持続的に身体に取り込まれた，規制された即興的行動を生み出す生成的原理（the durably installed generative principle of regulated improvisation）（Ibid.: 78）」とされるが，決定的役割を果たすのは，これと対置されて個人の言語使用を暗黙裡に認めたり規制したりする体系として働く言語的市場の構造である（Ibid.: 37）。しかし，この場合，「生成」のための潜在力には社会と直結しない言語能力も含まれるはずである。「必要な制約の総体」である言語という社会的共有財があればこそ，社会における個人の適切な言語使用が保障されることは疑いようがないのであり，その点でも個人のハビトウスにもとづく言語行動の客観性が担保されているというべきである。ブルデューもハビトウスのもつ主観的役割と客観的役割の共存を繰り返し述べているが，その客観的部分は社会の成員が共有する言語である。言語変種のもつ市場価値の差を重視するあまり，言語変種の基底にあって共同体に共通の記号として機能するために不可欠な言語の共通性の部分をブルデューは軽視しすぎているように思われる。

ブルデューの言語論では，「同じ言説が異なる市場で受け取る価格の変動を決めるのは言語市場で通用している力関係とその変動である（Ibid.: 69）」とされるため，たとえば，「社会（市場）が形式ばっていればいるほど，つまり正統な言語の規範に実際に合致する度合いが大きければ，そ

れだけ一層支配者，つまり権威をもって話すことを認められた（authorized to speak with authority）正統言語能力の持ち主たちによって市場が支配されることになる（Ibid.）」。このやや強引な一般化に問題があることは明らかであるが（Butler 1999: 123），こうした市場における支配 ── 被支配関係のしくみにもとづいて，ブルデューはさらに示差的な言説がもたらす象徴的支配（symbolic domination）あるいは象徴的暴力（symbolic violence）といった概念をもちだすわけである（Bourdieu 1991: 51-2）。

社会的条件が言語に与える（客観的と称する）影響を過大と思われるほど取り込むこうした議論は，理論言語学と言語社会学（社会言語学ではなく）の立場の違い ── 研究対象や方法論などの違い ── を考慮していないと言うよりも，むしろ，（ブルデューは否定するだろうが）言語学固有の仕事を否定し，言語学はブルデュー流の言語社会学であるべきと主張するのに等しい。[11] それにしても，上で指摘したように，もっぱら抽象的言語能力を対象とする理論言語学を批判するのとは逆の問題があることにブルデューは気づいていないかのようである。繰り返すが，ブルデューの言語論では言語と対置されるはずの言語市場のしくみにもっぱら焦点が当てられ，そこでの言語使用を可能にしている個人を超越した記号としての言語の潜在力は，過大に重視される市場やその影響下にある（とされる）ハビトウスの陰に隠れて，本来付与されるべきその決定的役割が一向に論じられることがない。しかし，ソシュール以来の言語学の常識では，既述のように，言語能力（ラング）と言語使用（パロール）の関係は相互依存関係にあることはそもそも当然の前提である。ただし，周知のとおり，このような抽象的概念としての能力と運用を二分するか一体とみるかについては，言語学界では立場が分かれる。

ブルデューと同様，ラングとパロールの分割を認めず，社会と個人が対立概念とならない体系機能言語学（SFL）の立場からブルデューを論じた Hasan（1999，2000）の批判がブルデューの言語論の「矛盾（contradictions）」として，社会的条件と対置される記号としての言語の役割の軽視を問題視するのも当然であろう。SFL の創始者たるハリデイは，周知の通り，「言語は社会的事実である」というソシュールのことばを認めながらも，言語を社会文化的コンテクストで解釈し，文化自体も記号論的観点から解釈されるものとみて，社会的記号（social semiotic）としての言語観をとる。ハリデイの想定する社会的記号としての言語は文から成る体系ではなく，テクスト（text）または談話（discourse）からなるもので，社会的人間である個人のさまざまな関係がからむコンテクストにおける意味のやりとり（the exchange of meanings）だとみるわけである（Halliday 1978: 2）。既述のように，批判的言語分析（CLS）は，ブルデューを援用しているが，文法的分析の部分は SFL による（Fairclough 2001: 11）。ただし，SFL では CLS やブルデューと異なり，特定のイデオロギーを分析にもちこむことはしない。ハリデイによれば，「社会的人間（social man）」は一方で，単一の存在物（a single entity）とみられるが，そこでは，個人の行動，行為および環境（とくに他の個人からなる環境の一部）との相互作用と他方において，当人の生物学的性質，とくにその脳の内部構造とを区別することができる。こうした観点から，言語

は，まず第一に「行動としての言語（language as behaviour）」として，第二に「知識としての言語（language as knowledge）」という観点から考察できるとみるわけである（Ibid.: 12-3）。なお，ハリデイの「知識としての言語研究は，個人の頭の内部で起こっていることを発見することである（Ibid.）」という見方は言語の使用を可能にする潜在力を認めていることを示している。ハリデイは言語に関するこの2つの観点（perspectives）は相補的だが，切り離せないものとみる（Ibid.: 13）。さらに，「言語行動は一種の知識とみなせる」として，「有機体間（inter-organism）のコミュニケーションとしての言語の社会的諸相に注意を集中しながら，なおかつ個人のそうした行動のしかたはどうしたら分かるのか，という基本的に有機体内（intra-organism）的な問いを発することができる」とし，これは心理社会言語学（psychosociolinguistics）というべきものという。このあたりの事情について，ハリデイは「脳は言語を貯える能力をもつとともに，効果的なコミュニケーションにそれを使用するという事実は，コミュニケーションが行われることを含意する。つまり，個人は，他のひとびととの相互作用を特徴づけるような「行動の潜在力（behaviour potential）」をもつということである」と説明している（Ibid.）。この潜在力にはハビトウスのようなものも含めてよいが，それには当然，脳中の言語能力が不可欠の一部をなすわけである。

このようなハリデイの言語観は，ブルデューとある程度の共通性があるものの，あくまで言語の記号的側面（「知識としての言語」）を一方の中核に据えている点が異なることに注意したい。ハサンが指摘しているように，ブルデューの議論には記号としての言語の側面を軽視するあまり，そのモデルとの整合性がとれていないところがある。性向という「構造化され，構造化する構造」を社会の生産と再生産の基本原理として拠り所とする枠組みであるなら，言語行動はなにより記号の仲介機能（semiotic mediation）の重要性を認めるのが理にかなっている（Hasan 1999: 62, 2000: 449）。

3.3. 言語学と社会学の関係

さて，言語学が社会科学を支配するようになった経緯は，ブルデューによれば，「（ソシュールに象徴されるような伝統的な）言語学のモデルがいとも簡単に人類学や社会学の領域に入り込んだのは，言語学の中核的意図，すなわち言語を行動と力の道具としてというよりむしろ知的考察（contemplation）の対象として扱うその主知主義的哲学（intellectualist philosophy）を受け入れたからだ（Bourdieu 1991: 37）」ということになる。

さらに，言語学の社会学への悪影響について，ブルデューは，Bourdieu（Ibid.: 32）[12]の「序文」で，カントの『否定的偉大さの概念の導入に関する試論』（*Essay on the Introduction of the Concept of Negative Grandeur*）における吝嗇家（miser）の例を引き合いに出して次のように述べている。

「社会科学は明らかに十度の吝嗇の陣営にあり，社会科学が克服しなくてはならないさまざまな社会的力（social forces）をカント風に，いかに考慮するか，そのすべを知っていたならば，そ

の長所をより正確に評価できるようになることは疑いない。このことがなによりよく当てはまるのは，あらゆる社会科学にその影響力が及んでいる，あの学問［＝言語学］の固有の対象 ── すなわち，言語(langue)，についてである。この言語とは，ソシュールの著作では，言語に内在するあらゆる社会的変異（all inherent social variation）を除外することによって構成された一にして不可分の言語であり，チョムスキーの場合には，機能的な制約を犠牲にして文法の形式的特性に特権を与えることによって構成されたものである（Ibid.: 32，傍点筆者）」。さらに，「言語学的モデルが受け入れられたのは，知識人向けの（社会）哲学として認められたからで，そのために言語は，行動や権力の道具というより，むしろ知的操作の対象となった」とも述べる。

こうして，「社会的なるものを考慮から除外することで」，「言語やその他の象徴的対象をそれ自体目的であるかのように扱うことを可能にして，構造主義言語学の成功に相当程度貢献したが，それは純粋に内的で形式的な分析を特徴づける「純粋な」稽古（the ‘pure’ exercises）に結果（勝ち負けの影響）が問われぬゲームの魅力（the charm of a game devoid of consequences）を賦与したからだ（Ibid.: 34）」と特有の語り口で批判する。

つまり，ブルデューは，伝統的に言語学の研究対象として自律的，同質的なものとして抽象化された（「抽象的に定義された（Bourdieu 1991: 32, 38）」）言語能力としてのラングや言語能力を重視するその純粋理論的な方法論の限界を乗り越える必要性を強調するとともに，言語能力が負うているさまざまな社会的生産条件のすべてを無視して（「言語という道具をその生産及び使用の社会的条件から切り離すことによって言語学を社会科学の中でもっとも自然［科学的］なものにした発端の過程」をまず批判するわけである（1991，p.33 参照，強調原著）。抽象的に定義された厳密に言語的な能力は人の言語現象の多様な要因のひとつにすぎないのであり，それだけに頼って，談話（discourse）の統合された特異性を適切に説明しようとするのは誤りだと指摘し，独自の社会理論とイデオロギーにもとづく言語観を開陳する。ブルデューが想定する独自の社会学的モデルは，「社会学が言語学と言語学の概念が今日でも社会科学に対して行使しているあらゆる形式の支配から逃れることができるのは，この科学（言語学）が確立された過程でおこなわれた対象構成の操作及びその基本的概念の生産と流通の社会的条件を明るみに出すことによって（ibid.: 37）」可能になる。彼は，「示差的偏差と社会価値」と題するセクションで，言語学が関与的(pertinent）としてとりだす対立（oppositions）が社会学からみて（社会的差異の再解釈（re-translation））として関与的な言語的対立とは異なるとして，目指すべき言語社会学のイメージを示している。すなわち，「言語の構造的社会学は，ソシュールによって示唆（inspire）されたものの，彼が押しつけた抽象化とは逆のかたちで構築されるもので，社会学的に関与性のある言語的差異の構造的体系と社会的差異のこれと同じく構造的体系の間の関係をその（研究）対象としなくてはならない（ibid.: 54，強調原著）」というわけである。

この最後のくだりは正論のように聞こえるが，そこでの「構造的体系の関係」とはすべて「社会学的に関与性をもつ言語的差異」と「社会的差異」であることに注意したい。すなわち，ここ

で語られているのは，あくまで「言語の構造的社会学」であり，言語学自体ではないし，また「抽象的に定義された厳密に言語的な能力は人の言語現象の多様な要因のひとつにすぎない」のは事実だとしても，言語現象を基底で支えている記号としての言語の構造的体系の役割が不当に低く見積もられていることは他の場合と変わりはない。

4．ブルデューと発話行為理論

これまでは，ブルデューの言語論を理論言語学との関係で，とくに研究対象としての「言語」の位置づけと社会的諸相との関係でみてきたが，本節ではブルデューの言語論で扱われている語用論の問題，とりわけオースチン（Austin 1962）の発語行為理論の議論を検討する。ブルデューの言語行為の語用論的位置づけに対する姿勢は，「象徴的資本（symbolic capital）」を論じた節（Bourdieu 1991: 72f）や Austin（1962）の発話行為理論の功罪を論じた「認可された言語（authorized language）」の節（Ibid.: 107f）で展開されている。ブルデューでは語用論という分野全体が正面から論じられているわけではないが，言語を話者の社会的機能や社会的位置（階級，地位，獲得した言語変種などがからむ示差的文化資本や経済資本など）からとらえずにおかない彼の言語論では当然ながら，社会的空間における発話行為（発語内行為）としての「遂行文（performatives）」の効力なども権力や正統性と関連づける独特の見地から論じられることになる。たとえば，「まさに断定（asserting）という行為においてそれが断定することを現実にもたらすと主張する遂行的談話の効果は，その断定を行う当人の権威の程度に直接的に比例する（Ibid.: 223）」と発話者の権威と発話行為の効力が直接対応するとして，いささか過激な一般化を示す。

ブルデューの発話行為理論及び語用論の批判は，言語学あるいは語用論分野における発話行為理論の位置づけや意義を言語学的見地から全体として論ずるというよりも，むしろ「制度」ということばに表れているように，社会における権力と支配 ── 被支配関係とからめ，発話行為の適切さや効力が言語表現（発話）内部にあるものではなく，「外部（制度）から与えられる」力 ── 「権威」や「権限」などに左右されることに目をつぶる姿勢に向けられるのは理論言語学批判の場合と同じである。ここでもブルデューのイデオロギーがらみの読み（解釈）やオースチンの理論に関するやや勇み足的な議論がみられる。つまり，発話の言語表現と発話者，社会的場面といった両面がからむ発話行為の様相のうち，社会的位置や条件のもつ意味合いを強調するあまり，それが効力をもつための前提部分である言語表現が無関係であるかのような議論が展開されるのである。

ブルデューが言語表現と内容自体の無力さを示す恰好の例と考えているのは，オースチンがその連続講義Ⅰ（Austin 1962: 5, etc.）で「遂行文」の例としてあげている「命名（naming）」行為の例，「この船をクイーン・エリザベス号と命名する（I name this ship the *Queen Elizabeth*）」であるが，そこでオースチンはその効力と適切性（felicity）に関して，この発話はしかるべき場（進水式）でしかるべき人物によって，しかるべき条件下（船腹の横でシャンパンの壜を手にする，

など），すなわち儀式的な場の条件がなくては効力がないことを解説している。遂行文を検討するに先立って，別の個所でブルデューが世界をつくりだす語の力について語っている次のくだりにまず留意しておきたい。

「語の（権）力（the power of words）に関する素朴な疑問は，言語使用の問題，したがって語が使用される社会的条件の問題をそもそも抑圧したことに論理的に含意されている。ソシュールが内的言語学と外的言語学，つまり言語の科学と言語使用の科学とを根本的に分離したのを容認することで，言語を自律的な対象として扱った途端に，語の内部に語の権力をみるはめになった，すなわち，あるはずのないところにそれを探すことに追い込まれたわけである（Ibid.: 107）。」ここは，Ziff（1969：233）が語の「意義（sense）」の柔軟性について，「自然言語の語彙はたえず再創造され，ある特定の語で使える意義の範囲はつねに変えられ，さらにそれぞれの意義の可能な解釈もたえず変えられる」としていることが想起される（Brown 1995: 8 参照）。「意味の用法説」と同様，この「意義」に関する古くからある見解も，「意義」のどの側面に注目するかによってその妥当性が変わるたぐいのものである。そもそもブルデューは新カント派の理論に賛同しており，社会世界に関する限り，言語及びより一般的にはさまざまな表象には現実を構築する力（固有の象徴的力）があるとしている（Ibid.: 105）。その典型例として命名行為（the act of naming）があげられているわけである。誤解のないように断っておきたいが，ブルデューのいう「命名」行為とは，オースチンの例のような儀式的な「明示的遂行文」ばかりでなく，一般的に言葉を使って世界の現実を知覚し，構築するものがそれに当たるとしていることである。[13] ブルデューは，むしろ，「社会的行為者はだれでも命名する力をもちたいとか，命名によって世界を構築したいと願っているものだ」とし，そうした命名の例として，ゴシップ，中傷，嘘，侮辱，推挙，批判，議論や賞讃のようなものも，厳粛で集団的な命名行為の日常的でささいな具体例だとしている（Ibid.: 105）。

こうして，ブルデューは，「社会的行為者（social agents）が社会的世界（social world）についての知覚を構造化することによって，命名行為はこの世界の構造を確立するのに力を貸すことになるが，それが広く容認されればされるだけ，つまり権威に認可される度合いが大きければ大きいほど，それだけより大きな意義をもつことになる（Ibid.: 105）」と言うのであるが，同時に，「表現がもつ発語内効力（illocutionary force）は，（中略）その効力が指示され，あるいは表示されている当の語そのものに存在するということはありえない（Ibid.）」とする。そして，「象徴的交換が純粋なコミュニケーションの関係に還元されたり，またメッセージの情報内容がそのコミュニケーションの内容のすべてである場合は，ごく例外的なもの（実験により作りだされた抽象的かつ人工的な状況）にすぎないとも述べている（Ibid.）。語の力とは代弁者（spokesperson）に委任された力（the delegated power）であって，彼の発話 ── つまり，彼の談話の実質とそれと不即不離の話し方とは，とりわけ，彼に付与された代表の保障（the guarantee of delegation）の証拠であるにすぎない」と言う（Ibid.: 107，強調原著）。このことから，「談話自体，つまり，

いわば発話のきわめて言語的な実質の内部にことばの効力（efficacy of speech）の鍵を発見したと考えた」のはオースチン（そして後にハーバマス）が犯した「誤謬の本質（the essence of the error）（Ibid.）」であり，「オースチンの遂行的発話を規定しようとする企ての限界（そして興味を引く点）は，彼が自分がしていると考えていることを厳密にはしていないということで，そのため，最後までやり遂げることを妨げられたということである（Ibid.: 111）」というわけである。ブルデューは（オースチンだけでなく），語用論（したがって一般に言語学）が（とりわけ社会学との関係で）言語的なものと言語外のものの区別をその自律性の根拠として主張するものの，結局それを維持できないのは（ある）発語内行為が社会秩序全体（the whole social order）を背後にもたなくては認可されない制度の行為（acts of institution）だからだとする（Ibid.: 74）。遂行的な発話行為（発語内）の効力が言語ではなく，ある言語的実践行動を生み出したり，受け取ったりする制度的条件（institutional conditions）だとするこの考え方にはたしかに頷ける点も含まれるが，ブルデューのようにすべての言説に一般化してしまうのは極端すぎる見方であることを少し検討してみよう。

ブルデューのいう「制度（institution）」とは具体的な概念というよりも，個人に力や地位やさまざまな資源を与える，比較的持続性のある社会関係をいう（Thompson 1991: 8）。ブルデューは，発語内行為を行うのに必要な権威を与えるのがこの制度だというのである。彼は明示的遂行文と暗示的遂行文の区別にも言及しているが，発語内行為（効力）の「社会的魔術（social magic）（Bourdieu 1991: 42）」が言語外からくる力によるものであることを示す例としてとりあげるのは，もっぱら命名行為や洗礼行為や開会宣言などの儀式的な「明示的遂行文」（いわゆる遂行動詞が使われる遂行文」）である。一般の人々がいくらそうした開会宣言をしようとしたり，部下が上司に命令行為をしても（制度上の権限が与えられていないため）効力がないことを繰り返し強調するわけである。

ブルデューの言語論が日常言語哲学派の言語観に類似していることは，ブルデューの語の意味観が日常言語哲学派の「意味の用法説」に近いことからも明らかであるが，オースチンの発話行為理論が間違っているのは社会的諸条件を十分に捉えていない点だとするわけである。ブルデューによれば，遂行的発話（遂行文）の問題も結局のところ，あらゆる言語的交換において起こる象徴的支配（symbolic domination）の特定の一例にすぎないとみれば一層明らかになるという（Bourdieu 1991: 72）。オースチンの遂行的発話の説明は言語学の世界だけに限定されるものでないとし，「そうした制度の行為（acts of institution）は，ことばの魔術が働くために満たされなくてはならない諸条件（行為者，時間と場所など）を規定する制度の存在とは切り離せない（Ibid.強調原著）」というのである。

ブルデューはオースチンのいう「適切性条件（felicity conditions）」をとりあげ，この条件は社会的条件（social conditions）── つまり，命令を下す人には命令を受ける人に命令する権限がなくてはならないのと同様，船の命名に出ていく人物にはその権限がなくてはならない，という。

トンプスンも，ブルデューに従い，オースチンが遂行文が適切に（felicitously）発話されるには「慣例的手続き」に従う必要があるとしながら，その中身を論ぜず，また発語内行為が「慣例的手段（conventional means）」を用いる点で発語媒介行為から区別される，という趣旨のことを述べていながら，そうした慣例的手段をオースチンが検討していないと批判する（Thompson 1991: 9）。ブルデューがあげている儀式的な明示的遂行文に関する限りは，ブルデューの説明は問題なさそうに見える。しかし，そうした特殊で儀式的なものとは縁のない「場」，ごく日常的な状況でのごく普通の相互行為における発話＝発語内行為についても同じことが言えるのかおおいに疑問である。

ブルデューはさらに，言語学者がオースチンがその「遂行文の一貫しない定義（inconsistent definition）」でもちだした問題提起を忘れて，「市場の効果を無視する狭義の言語的定義に戻る口実を見つけて」，「遂行的発話が機能する社会的条件の分析を拒否できるようにした（Ibid.: 73）」とする。そして，これをするために，明示的遂行文と「より広く，何かを言うという単純な事実以外の行為を達成するために使われる陳述を意味するものとして考えられた遂行文，つまりもっと簡単に言えば，正確に言語的な行為（例えば，開会を宣言すること）と言語外の行為（開会を宣言するという事実により会が始まること）を分けたわけである」と主張する。ここで，ブルデューが問いただしているのは，発語内行為と発語媒介行為を分け，発語行為が効果を達成すること（the achieving of certain effects）である後者を言語外の問題としたことである。ついでながら，ブルデューの言葉尻をとらえるわけではないが，この区別はもちろん言語学者によるものでなく，単にオースチンの分類を追認したものである。オースチンの発語行為，発語内行為，発語媒介行為の区別や定義がはらむ問題については，オースチン自身（Austin 1962: 120f）も論じているし，その後も議論されていることは周知のとおりである。バトラー（2004：26 f）も社会学の観点から，発語内行為と発語媒介行為を論じ，「多く発語行為は，狭義には「おこなわれる」ものだが，そのすべてが効果を生み出したり，一連の効果を導く力を持つとはかぎらない」として，言語レベルでの行為が効果をもつ（有効な行動になる）わけでないことを強調している。しかし，繰り返しになるが，ごく日常の大多数の相互作用では参加者は権威だの権限だのといった社会的条件とは無関係になんらかの発語内行為をたがいに行っているし，たとえ発語媒介効果（perlocutionary effects）がなくてもたいして問題になるわけでもないという相互作用の現実はどう説明するのか。たとえば，部下が上司に，子供が親に向かってある種の「命令」や「指示」行為を（ある種の間接発話行為を使って）遂行することは珍しくないし，もちろんその逆もあるが，そこには「社会的魔術」のかけらもない（つまり，発語媒介効果がない）こともまれでなく，またその効果を期待しないこともめずらしくないと言ってよい。発語内行為の中にはたしかに上下関係や権威，権限といった社会的条件抜きに論じることのできないものがあることは否定できないが，それは日常の無数の発話行為（慣習行為）の一部に当てはまるにすぎない。哲学的観点からの一般化をめざすオースチンや言語学者が政治的，社会的イデオロギー抜きで発話行為の諸相を論じている

ことを批判するのはいささか筋違いというものであろう。ただし，これに関連して，言語のもつ力や権威が「言説そのものの本質的特性（the intrinsic properties of discourse）（Bourdieu 1991: 113）」にはないとするブルデューはどういうわけか一切触れていないが，同じ日常言語哲学派のグライスの「発話の意味（sentence/utterance-meaning）」と「話者の意味（utterer's meaning）」の違い，つまり，「言われたこと（what is said）」と「推意（implicature）」の間の食い違い（「間接発話行為」や「意図暗示的（off-record）方略」のような）が日常的な言語活動の常であることを指摘しておくのが公平というものであろう（Grice 1987: 87f, etc.）。発話そのものの言語的意味が発話者の意図と直結するものでないことは，語用論でお馴染みの議論であるが，そこで問題になるのは（認知的推論過程を含めても）ブルデュー流の社会的条件のごく一部にすぎない。そこでは，たしかに「象徴的力関係」や社会や市場からの「検閲」などの要因による言語表現の調節（たとえば，ポライトネス）が行われたりするが，多くは当事者の脳内の想定や知識，及び文脈（「場」）の解釈や評価にもとづく発話の調節や解釈であって，そこにイデオロギーが入る余地はほとんどないと言ってよい。

周知の通り，語用論の分野，とりわけ関連性理論（Sperber & Wilson 1995）などでは発話行為理論そのものはあまり高く評価されていない。ただし，発話行為理論が人の言語行為の認知的しくみや諸相を過不足なく説明できる包括的理論にはもちろんなりえないし，オースチンの本来の意図だったわけでもないが，この理論が語用論にもたらした知見の意味合いはけっして小さくないことは改めて強調するまでもない。関連性理論でもその「表意（explicatures）」，つまり「言われたこと＝発話の意味」と「推意」（implicatures）」つまり言外の意味（話者の意図）の区別にあたって，前者に発語内行為の標識を含めることからわかるように，「発話行為」や「発語内行為」の概念やその基本的視点は語用論や社会言語学に定着しているといってよい。トンプソンも，ブルデューが結婚や洗礼のような，発話行為が社会的儀式の一部であるような場合にあまりに比重をおきすぎていて，友人どうしの会話にみられるように，個人が比較的形式ばらない対面的相互作用を行うようなことをとりあげていないことに触れてはいるが，言語の制度上の側面を社会学的想像力で追及し，発話行為理論に関するこれまでの研究に概して欠けていた言語使用の社会条件の一部に光を当てたことは評価している。その評価は妥当なものであろうが，同時に，功罪の「罪」に相当するものも同様に見逃せないものである。すなわち，日常の相互作用に適用される一般化をめざす観点からは，ブルデューの議論では（オースチンの意図とはうらはらに）「遂行文（performatives）」をことさら特別なものであるかのように取り出して，しかも日常において大部分の発話がそうであるように，単にある（社会的）行為を遂行するにすぎないものを，言説の本質的特性を意図的に無視することによって社会的条件（話者の社会的機能や権限＝権力（power））の働きを過大にもちあげるのは，イデオロギーがらみとはいえ，オースチンが意図したと思われる日常言語における発話行為の実態からかけ離れた，偏った見方というべきであろう。[14)]

5．おわりに

以上，ブルデューの言語論をその社会理論との関係において原典に即してあとづけてきた。そのイデオロギーにもとづく視点から構造主義や形式主義の言語学の言語観と方法論やその概念に「支配されている」社会科学の欠陥を厳しく糾弾し，社会哲学と訣別するために，社会における（象徴的）権力を反映する言語現象のありように切り込む独自の言語社会学的な言語論を展開するわけである。ブルデューのモデルは「慣習行動の理論」にもとづくものであり，「言語的生産と循環・流通（circulation）言語的ハビトウスとその産物を供給する市場（markets）との関係とみなす」モデルであるが，「コードについての厳密に言語学的分析の正当性を疑うものでも，またそれにとって代わろうとするものでもない」と言いながら，関与する要因のうち，狭い意味での抽象的言語的能力に頼って，言語が「その生産の社会的条件に対して負うているすべてのものを無視しながら，言説が示す特性や特異性を説明しよう」としたのは誤りだ，とする（ibid.: 37-8）。

ブルデューによると，どんなに個人的でささいな言語的相互作用であっても，社会構造の痕跡をもっているのであり，こうした言語学の学問的枠組みでは言語の形成や使用（運用）にみられる特定の社会的政治的条件を把握できないというわけである（Thompson 1991: 2）。ブルデューは，言語自体は社会的，歴史的現象であり，言語的交換（linguistic exchanges）は他の諸々のものと同様に，日常的な慣習行動（practice）であるから，言語がもつこうした社会的，歴史的性質と実践的側面を無視する言語理論は失うものが多いとする。ブルデューの慣習行動の理論は，客観主義にも現象論的な主観主義にもくみしない立場をとるが，このために直接体験とは切り離す必要を考慮しながら，同時に社会生活の実際的性格をも正当に扱うアプローチをとるわけである（Thompson 1991: 12）。言い換えると，ブルデューの議論の基本は，人々が相互作用で社会行為（発話行為など）を遂行するやりかたは，相互作用にかかわる人々の社会的位置（階層や職業）やそれ以前の歴史や経験（これが知覚・思考や行動の性向の体系としてのハビトウスを構成する）に依存する，という想定にもとづくわけである。

ブルデューが繰り返し主張する論点は，人々が社会的実践（social practice）の場で使用する言語変種の重みや価値はどのような人々とどのような場面で言語をどのような目的や機能でどのように使うのかなどによって決まってくるが，その価値は，言語変種そのものの社会的な価値づけや社会における当人の階層や関係する人との力関係（つまり上下関係や権力関係）しだいである，というものである。つまり，既述のように，ブルデューは社会における言語やより一般的には表象（representations）に対して，現実を構築するという特定の象徴的効力を与える新カント派の理論を「完全に根拠のあること」として支持するわけであるが，そこでは言語（言説）の価値は市場（market）によって決まるとする経済学的観点が提示される。「発話（utterances）がその価値（及びその意味）を受け取るのは，ある市場との関係においてのみであり，この市場は，固有の価値形成の法則によって特徴づけられている。発話の価値は，話者たちのさまざまな言語能力

の間で具体的に確立される力関係に依存する」として，さらにこの言語的能力は話者の生産能力であり，かつ適当に使用したり，(相手の生産物を)評価する能力でもあるとする。またブルデューは，発話の価値は，言語交換に関わる行為者たちが自らの生産物にもっとも好意的な（有利な）評価基準を押しつける能力(capacity)に依存するが，この能力は言語学的な観点だけから決定されるわけではない，という。言語的な力関係は，その場で通用している言語的強制力(prevailing linguistic forces)によってだけ完全に決まるわけではなく，話されるさまざまな言語，そうした言語を使用する話者，そしてそれに対応する言語能力を所有することで規定されるもろもろの集団のおかげで，社会的構造全体がそれぞれの相互行為（それゆえに発話される言説）の中に現われている（Bourdieu 1991: 67)」というわけである。

こうしたブルデューの言語観が研究対象としての抽象化された言語にこだわる理論言語学や社会との関係を扱いながら言語の諸相を中心とする社会言語学あるいは語用論に対する厳しい見方につながることをみてきた。しかし，その言語観は，言語と社会の相互依存関係をとりあげながら，影響の比重のとりかたが一方的で偏っていること，つまり経済的，社会的条件への依存が過度であり，肝心の言語の記号論的機能の側面が軽んじられすぎていること，言語が周辺現象になっていることを指摘した。さらに，語用論 ── 発語行為論の議論では，言語の制度上の側面を社会学的に追及し，言語使用の社会条件をとりあげたことは評価できるものの，ブルデューの議論ではごく日常的なささいな相互作用の発語内行為の実態をほとんど無視しており，遂行文の言語的性質や適切性条件よりも社会性や社会的条件（話者の社会的機能や権力）を特別に扱いすぎることを指摘した。ただし，「ブルデュー的左翼」とも称されるイデオロギーがらみのその特異な言語観がブルデューの出身国フランスや他の西欧諸国の階級社会や言語の様相を反映した特殊なものとみることはできない。たとえば，「言語場の構造，つまり，言語的資本(言いかえれば，客観化された言語資源を取り込む機会）の不平等配分にもとづくもっぱら言語的な力関係の体系が媒介することで（Bourdieu 1991: 57)」，言語表現や理解に格差が生じて，さまざまな社会的差異が再生産されるしくみのようなものが日本のような社会にもあることは否定できない。上で見たように，ブルデューの言語論にはたしかに行きすぎた一面的な一般化も多いが，彼の言語と社会の関連に関する議論には社会的真実に鋭く切り込む知見が少なからず含まれていることは認めなくてはならない。

ブルデューの言語論は社会のほとんどあらゆる面をとりあげているが，本稿はそのごく一部を取り上げたにすぎない。とくに社会言語学に関するものは興味深いものがあるし，教育と言語の関係に関する議論もすくなからぬ問題提起をはらんでいるが，そうした問題の検討は稿を改めるほかない。

〈注〉

1）habitus（ハビトウス）と disposition（性向）は，場（field）や資本（capital）とともに，ブルデュー

の（社会的）慣習行動の理論（theory of practice）における基本概念である。以前にも使われていたこの概念は，Marcel Mauss のものをブルデューが練り直したものと言われるが，概略的には，この概念は慣習行動の理論において社会科学や人文科学における客観主義（objectivism）と主観主義（subjectivism）の対立を解決すべく導入されたものである。ハビトウスは「構造化する構造として機能する傾向をもつように構造化された構造で永続性があり置き換え（配置変え）可能な性向の体系，（systems of durable transposable dispositions, structured structures predisposed to function as structuring structures.....）（Bourdieu 1977: 72）」と定義される。定義の中心概念である性向（disposition）はフランス語では英語より広い意味範囲を意味するが，ほぼ同意義としてよいとされる（英語版の訳者 R. Nice の注記（Ibid.: 214）参照）。概略的には，とくに意識したり，規則のようなものに従うというのとは異なる意味で，規則性をもつ行動を生み出し構造化するものとして想定された概念である。性向（disposition）は，人（行為者）が社会的環境で獲得した持続的な知覚や思考や行動の機構である。個人（行為者）は生まれ育つ過程で出会う客観的（経済的，社会的）条件に対応して，そうした性向を社会的に形成するとされるが，こうしてブルデューは客観的な社会行動が個人の主観的な心的経験や知識に教え込まれる仕組みを理論化したとされる。ブルデューの考えでは，社会生活は単なる個人の行動の集合体ではなく，慣習行動は単なる個人の意思決定という観点から理解しうるものでないが，かといって，客観主義の哲学的理論が主張するような個人を超えた社会の「構造」によって決定されるわけでもない（Jenkins 2002: 74）。

なお，ブルデューの思想やハビトウスの概念とポライトネス理論におけるポストモダン的な「言説的アプローチ」との関係については，Eelen（2001），Watts（2003），Mills（2003）や栗原（2009）も参照。

2）ブルデュー自身も自分の仕事が「根強い誤解」を受けていると述べている（ブルデュー　2007：9）。

3）このような特徴づけとブルデュー言語論に関する論議については，Chouriaraki & Fairclough（2000），Hasan（1999，2000）を参照。

4）ブルデューが言及する言語学者（及び社会言語学者）は，ソシュール，ブルームフィールド，ウォーフ，バンヴニスト，チョムスキー，B・バーンスタイン，ラボフ，レイコフなどであるが，本稿ではその議論をすべて細部にわたってとりあげる余裕はない。

5）ブルデューの言説は長文の連続で，その文体は難解かつ「過度に不透明」であることで知られている。このため，本稿では要約し難い言説や誤解を招きやすい表現については，原文（仏語）を忠実に反映しているとされる英語版（ブルデュー自身も目を通していたとされ，〝in every sense authorised translations（Jenkins 2002: 165）〟とされる）につき，必要に応じて邦訳とつきあわせながら，本文を直接引用する方針をとることにする。また本論では似たような言説が繰り返し出るが，それは理解のための一種のパラフレーズとして利用するためでもある。ブルデューの主要な著作には邦訳（藤原書店）があるが，原文を反映してか，かならずしも読みやすいとは言い難く，誤訳と思しきものも散見される。ブルデューの全般的な評論としては，山本（2007）も参照。

なお，基本概念に関して訳者間で異なる場合は，翻訳の用語を必要な修正を加えて使う。たとえば，〝practice〟は訳者により「実践＝慣習行動」や「行動」，「実践」と訳され，〝field〟は「場」や「界」となる。本稿では，翻訳をそのまま引用する場合を除き，前者は（action と区別するため）「慣習行動」あるいは単に「行動」とし，field は「場」とする。ただし，ブルデュー自身は pratique（英 practice）と action（英 action）を区別していないとする見方がある（ブルデュー　2007：302，「訳者あとがき」）。また〝disposition〟もいくつか邦訳があるが，ここではもっとも分かりやすい「性向」としておく。なお，言語学以外の分野の訳者による言語学用語の邦訳には学界に定着していない日本語訳もあるので注意が必要である。

なお，ブルデューの難解な言説の理由と由来については，Jenkins（2002：162 f）が論じている。Jenkins は，ブルデュー自身は自分の複雑な言説スタイルが複雑な社会を正当に扱うため，あるいは読者の誤解や単純化を防ぐため，などと述べているのに疑義をとなえ，ブルデューの（難解な）語やス

タイルがその社会理論の複雑さを反映するものとは言えず，フランスの知識人でも簡明な表現をする向きもあることから，フランス人だからとも断定できず，むしろ自らの非凡さや名声や地位を維持し高めるための方略（strategy）なのかもしれないと示唆している。

6）ここでいう低い文化資本とは，さまざまな社会的条件に由来する低学歴と低教養をさす。

7）*modus operandi* と *opus operatum* というブルデューの好むラテン語用語の意味合いについては，構造主義と新カント主義を対比させて論じたブルデュー自身の解説（パラフレーズ）によってみるのがいいかもしれない。すなわち，「*modus operandi*，つまり意識の生産的活動を強調する新カント主義の伝統と異なり，構造主義の伝統は，*opus operatum*，すなわち構造化された構造を強調する。このことはその伝統の創始者たるソシュールの言語観において明らかである。つまり，構造化された体系として，基本的に言語（ラング）が発話（パロール）の理解の条件として扱われるわけだが，それは音と意味の一定の関係を説明するために再構成されなくてはならぬ構造化された媒体なのである（Bourdieu 1991: 165-6）」。

8）ここはチョムスキーがらみの議論であり，〝excution〟とは performance（言語運用）を意味するとみてよい。なお，ブルデューがここで参照しているチョムスキーは，Chomsky（1964）であることは他の箇所からも明らかである。ブルデューのソシュールやチョムスキーの理論とその帰結に関する理解と解釈が不十分であり，一面的に過ぎることは，Hasan（1999）や Robbins（2000：428）らも触れているが，ここではとりあえず，ブルデューが参照していると思しきソシュールのテクストが『一般言語学講義』であること，またチョムスキーの場合は，Chomsky（1964）など，今となってはチョムスキー自身も廃棄した研究プログラムであるが，生成文法の標準理論における基本的前提にはあまり変わっていないものも多いことを指摘しておく。チョムスキーが生得的な言語習得装置としての普遍文法（universal grammar, UG）という概念・用語を使いだした80年代以降は，UG に基づいて習得され安定状態にある言語能力として，個人が習得した脳内言語には〝I-language（脳内言語）〟という用語を使っているのは周知の通りである。注意すべきは，チョムスキーの competence と I-language は同義ではないこと，またそのどちらもソシュールの「ラング（langue）」とは（共通点をもちながらも）異なることに注意したい（Chomsky 1995, 2000）。たとえば，「文」の扱いについて，ブルデューが使っている『一般言語学講義』では明確ではないが，ソシュールが，個人の意思により構成される「文」という単位は，langue でなく，parole に属するとみなしていたことは，原資料（とくに第三講義に関するコンスタンタンのノートで明言している（ソシュール，影浦他訳，2007参照）。同様に，チョムスキーの E-language も parole と同じではない。この点からして，ソシュールの「文」の位置づけに関して，チョムスキーが，「それはパロールとラングのあいだのどこかにあるのです。構造がなく，社会的産物でもないのでラングではありません。また，単に意識の行為であるパロールでもありえませんが，どこかそのあたりをうろついて（hang around）いるのです（Chomsky 2004: 56-7）」と「解説して」，ソシュールの体系では文の占める場所がないとしているのは理解しがたい。それは，おそらく，『一般言語学講義』のみを参照しているためであろう。

9）上の注で触れたことながら，ソシュールを扱う際にかならず問題になる出典と原典の問題について触れておきたい。ブルデューは，「ソシュールが流行る前にその『一般言語学講義』を系統だって読んだ（Bourdieu 1991: 32）」と述べているが，Robbins（2000：428）はこれを額面通りに受け取れないとしている。この見方は頷けるが，たとえブルデューのソシュール論が「ソシュール自身の思想を忠実に表わしてはいない（丸山　1983：17）」『一般言語学講義』に基づいていても，世の大方のソシュールに関する論議がこの書物にもとづいていることから，細部の文言の解釈自体をあげつらうのでない限り，それ自体大きな難点とみなすべきではないだろう（周知の通り，丸山（1981，1983）の見方は大幅に異なるが）。むしろ，ブルデューのソシュール言語学の意図や鍵概念の解釈自体の妥当性に注目すべきであろう。

10）本稿ではハサン（Hasan 1999）のブルデュー批判を詳細に再説，検討する余裕はないが，その論点は次の4つである。(1)ブルデューの言語学ならびにソシュールのテキストの解釈がともに単眼的であ

ること。そうした限定的解釈が最終的なものとして提示される限りにおいて，それらは誤解を招くものである。(2)ブルデューの記号論としての言語観が，たとえばチョムスキーのような形式言語学者のものに類似していること。記号の体系としての言語のきわめて重要な特徴を正しく評価できていないこと。(3)ブルデューのにわか（社会）言語学（sponteneous（socio）linguistics）がソシュールのいう「外的言語学」にほぼ等しいこと。外的言語学は，内的言語学と同様，話の半分でしかないため，ブルデューの言語学は，言語と社会の関係に関する説得力のあるモデルを提示できていない。(4)もしブルデューの言語観が教育行動の出発点として受け入れられるならば，その欠陥ゆえに，教育行動に（社会的差別などからの）解放力をなんら認めないことで，結果として，読み書き教育（literacy education）のプログラムとしては不満足なものになるのは避けられない。本稿では，Hasan がもっとも主力を注いだ(4)の論点を除き，なんらかの形で同様のトピックスを扱うことになるが，Hasan の議論が拠って立つファース（Firth）の反ソシュール的言語観 ── 言語の経験との結びつきを重視する路線 ── を引き継ぐ Halliday の体系機能言語学（SFL）の視点ではなく，特定の理論に偏らない視点をとる。

11）かつて Halliday も似たような主張，すなわち，社会言語学（sociolinguistics）から ‘socio’ を取りたい，つまり言語学は社会言語学であるべきだと述べたことがある（Parret 1974: 82）。なお，Halliday の「社会的記号（social semiotic）としての言語」理論の概要については，Halliday（1978）などを参照。

12）本稿で主として参照する本書（英語版の Bourdieu (1991): *Language and Symbolic Power*）はフランス語版（邦訳では『話すということ ── 言語的交換のエコノミー（Ce Que Parler Veut Dire: L’économie des échanges linguistiques）』という書名になっている）とは少し異なり，原典にある 2 つのエッセイが省かれ，別の 5 編が追加されたものである。フランス語の副題は〝The Economy of Linguistic Exchanges〞としてそのまま英語版の中でも使用されている。本稿ではこの著書を主たる資料として使い，ブルデューの社会理論をまとめた Bourdieu（1977）やブルデューが内外で行った講演を収録したブルデュー（2007）などを補足的に使う。

13）ブルデューは新カント主義の伝統に，フンボルトーカッシーラーとともに言語に関してサピアーウォーフらの名も挙げている（Bourdieu 1991: 164）。

14）発話行為理論に関するブルデュー寄りのやや詳しい社会学的議論については，Butler（1999：122 f），バトラー（2004：4 f，26 f，226 f）も参照。

References〈参考文献〉

Austin, J. 1962. *How to Do Things With Words*. Oxford: Oxford Univ. Press.

Bourdieu, P. (translated by R. Nice) 1977. *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

──. 1990. *The Logic of Practice*. Translated by R. Nice. London: Policy Press.

──. 1991. (translated by G. Raymond & M. Adamson, edited and introduced by J.B. Thompson) *Language and Symbolic Power*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Butler, J. 1999. Performativity’s Social Magic. In Shusterman (1999): 113-128.

Ｊ・バトラー，竹村和子（訳）2004.『触発することば』東京：岩波書店.

Ｐ・ブルデュー，稲賀繁美（訳）1993.『話すということ ── 言語的交換のエコノミー ──』東京：藤原書店.

──，加藤他（訳）2007.『実践理性 ── 行動の理論について』東京：藤原書店.

Chomsky, N. 1964. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The MIT Press.

──. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge: The MIT Press.

──. 2000. *The Architecture of Language*. Oxford: Oxford University Press.

──. 2004. *The Generative Enterprise Revisited: Discussions with R. Huybregts, H. van Riemsdijk, N.*

Fukui and M. Zushi with a New Foreword by Noam Chomsky. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

チョムスキー，福井直樹・辻子美保子（訳）2003.『生成文法の企て』東京：岩波書店.

Chouliaraki, L. & Fairclough, N. 2000. Language and power in Bourdieu: On Hasan's "The Disempowerment Game". *Linguistics and Education* 10 (4): 399-409.

Collins, J. 2000. Comment on R. Hasan's "The Disempowerment Game: Bourdieu and Language in Literacy". *Language and Education* 10 (4): 391-398.

Eelen, G. 2001. *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome Publishing.

Fairclough, N. 2001. *Language and Power*. 2nd edition. London: Longman.

Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.

Halliday, M.A.K. 1978. *Language as Social Semiotic — The social interpretation of language and meaning*. Baltimore: University Park Press.

Harris, R. 2001. *Saussure and His Interpreters*. 2nd edition. Edinburgh Univ. Press.

Hasan, R. 1999. The Disempowerment Game: Bourdieu and Language in Literacy. *Language and Education* 10 (1): 25-87.

—. 2000. Bourdieu on linguistics and language: a response to my commentators. *Language and Education* 10(4): 441-458.

Jenkins, R. 2002. *Pierre Bourdieu*. Revised edition. London & New York: Routledge.

栗原豪彦．2009.『ポライトネス理論をめぐる論争(2)——「合理主義的アプローチ」と「言説的アプローチ」』北海学園大学人文学部『人文論集』第 42 号：85-126.

丸山圭三郎．1981.『ソシュールの思想』東京：岩波書店.

—．1983.『ソシュールを読む』（岩波セミナーブックス 2 ）東京：岩波書店.

Mey, J. 2001. *Pragmatics: An Introduction*. Oxford: Blackwell.

Mills, S. 2003. *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Parret, H. 1974. *Discussing Language*. The Hague: Mouton.

Robbins, D. 2000. Bourdieu on language and linguistics: a response to R. Hasan's "The Disempowerment game: Bourdieu on language in literacy." *Language and Education* 10(4): 425-440.

Saussure, F. de. 1966. C. Bally, A. Sechehaye, & A. Reidlinger (eds.), *Course in general linguistics* (translated and annotated by W. Baskin). New York: McGraw-Hill.

ソシュール，F.，小林英夫（訳）『一般言語学講義』（岩波書店）

—，影浦　峡・田中久美子（訳）2007.『一般言語学講義 —— コンスタンタンのノート』東京：東京大学出版会

Shusterman, R. (ed.) 1999. *Bourdieu — A Critical Reader*. Oxford: Blackwell.

Stockwell, P. 2003. *Sociolinguistics: A resource book for students*. London & New York: Routledge.

Thompson, J.B. 1991. Editor's Introduction to Bourdieu (1991): 1-31.

Trudgill, P. 1983. *Sociolinguistics: An introduction to language and society*. Revised ed. London: Penguin Books.

Watts, R. 2002. *Politeness*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

山本哲士．2007.『ピエール・ブルデューの世界』東京：三交社.